

岩波ジュニア新書の40年そしてこれから

山本 慎一

中学・高校生が初めて読む新書

岩波ジュニア新書は1979年に創刊された新書です。今年、創刊40年を迎えました。これまでに『詩のこころを読む』（茨木のり子）、『砂糖の世界史』（川北稔）、『ひめゆりの沖縄戦』（伊波園子）、『正しいパンツのたたみ方』（南野忠晴）、『社会の真実の見つけかた』（堤未果）など多くのロングセラーを刊行してきました。

さまざまな出版社から新書が出され、書店の店頭には数多くの新書が並んでいる中で、中学・高校生をおもな読者対象としている新書は、ジュニア新書の他には「ちくまプリマー新書」以外にはあまり見当たりません。

ジュニア新書は全国の学校図書館に入れていただいていますし、授業で課題図書として取り上げられることも多く、そういう意味では、中学・高校生が初めて読む新書であり、中高生にとってもっとも身近な新書であると言えるかもしれません。

本の最終ページには、「ジュニア新書の発足に際して」という文章が載せられています。創刊時に10代の読者に向けて書かれたメッセージです。ここには、「学校で生じているささいな学力の差、家庭環境による条件の違いにとらわれて自分の将来を見限ったりはしないほしい」「簡単に可能性を放棄して現実と妥協しないほしい」と書かれています。

ジュニア新書が創刊された1979年頃は、高校の進学率が90%を超え、誰もが受験競争に追い立てられ、また高度成長期が頂点に達して社会の中に様々な課題があらわれてきた時期です。

そんな社会情勢のなかで、生きづらさを感じる若者たちに向けてメッセージを発したいという思いで創刊されました。

その思いは今も変わらずに持ち続けています。先行きの不透明な社会のなかで様々な困難に直面している現代の若者たちの指針になるような本を出していきたいと思います。

今年4月に『「空気」を読んでも従わない——生き苦しさからラクになる』（鴻上尚史）を刊行しました。この本もそんな思いが込められた1冊だといえます。これからもジュニア新書は、中高校生に寄り添い、並走しながら、彼らが直面する課題に共に向き合っていく新書でありたいと思っています。

小説の読書と新書の読書

近年、若者の読書離れが指摘されますが、その一方で、読書好きな生徒もたくさんいます。幼い頃から絵本や児童文学に親しみ、中学生になってからはファンタジーや青春小説、ミステリーなどを愛読するという生徒も多いでしょう。

でも、そんな小説や文芸作品を愛読する生徒が多くいる一方、新書をよく読む、という人はそれほど多くはないように感じます。それは、ひと口に「読書」といっても、新書と小説では読み方や読む目的が違って、必ずしも、小説の読書の延長上に新書があるわけではないからだと思います。

以前、首都圏の高校の教員・学校司書の協力を得て高校生約400人に新書の読書についてアンケートをとったことがあります。その結果、新書は、小説のように自分から進んで読むというよりも、「学校の授業の課題」あるいは「探究的な学習の参考図書」として読まれることが多いことがわかりました。授業の課題や参考図書として読むということであれば、やはり学校、そして学校図書館の関わりはとても重要だと思います。

「新書なんて読んだことない」「そもそも新書ってなんですか?」という生徒が初めて新書と出会う場所は学校図書館であることが多いのです。そのような出会いの機会をぜひ、学校司書の方々につくっていただきたいと思います。

多様な思考・考え方に触れるための新書

いま、教育現場ではアクティブラーニング（主体的・対話的な学び）や探究的な学びに注目があつまっ



ています。

そしてその一環として、生徒が自らテーマを選び、そのテーマについて論文やレポートを書く授業を取り入れる学校が増えているようです。そのようなスタイルの学習のテーマ選びや参考図書として新書はとても役立ちます。

たとえば、大阪の清教学園中学・高校の探究科教諭の片岡則夫氏が、論文のテーマ探しの授業の一環として「新書回転寿司」という「新書によるおためし読書」をやら

れていることを知りました。

学校の図書館で440冊の新書（もちろん、ジュニア新書だけではありません）を内容はバラバラにわけた10冊ずつのセットにし、生徒は1つのセットのなかから気に入った本を1冊選んで5分間読む。そして5分経過したらそれについての簡単な感想や評価を記録、そしてまた次の10冊セットから同じように1冊を選んで5分間読む、ということを繰り返します。

結果的に1回の授業で、一人の生徒が70冊ほどの新書を目にするようになるそうです。その後、生徒たちの評価を集計して、「新書読みたい度ランキング」としてまとめるそうです（片岡則夫「新書回転寿司：中学生が知識の扉をひらく」『岩波ジュニア新書読書ガイドブック2019』より）。

もちろん、持ち時間は1冊につき数分程度ですから、生徒がその本をはじめから終わりまで熟読するわけではありません。ほとんどの本は書名と著者名を見るだけで、選んだ本もせいぜい「目次」と「まえがき」を斜め読みするくらいかもしれません。でも、一度の授業で70冊もの新書に触れるというのは、生徒にとって刺激的な体験なのではないかと思っています。

それはまた、たくさんの本に触れることを通して、ひとつのテーマに関して多様な視点・論点があることを知る機会になるかもしれません。

自分にとっての「一冊」と出会う

こうして、さまざまなテーマの新書を目にする過程で、自分の好奇心をくすぐられるような1冊に出会えば、きっとその本を後でもっと読んでみたいと思うようになるのではないのでしょうか。

さきほど、新書は小説のように自分から進んで読むことが少ないというようなことを書きましたが、興味のあるテーマについて書かれた新書に出会うことさえできれば、あとは次々と新たな本に手が伸びていくことになるのではないかと思います。ジュニア新書は、そういう、一人の生徒にとって大切な、出会いの一冊になってほしいと思っています。

この「新書回転寿司」はあくまでもひとつの例にすぎません。学校の図書館を訪ねてお話を伺うと、それぞれの学校でじつに多彩な取り組みが行われていることを教えられます。

教育改革と新書の読書

2020年度から大学入試がセンター試験から大学共通試験へと変わり、国語に記述式問題が導入されることになりました。この入試改革によって、自分なりの考え方や自ら導きだした答えを「書く」「表現する」ことが今後ますます求められるようになります。

文章力や表現力を磨き、思考力を鍛えるためには、様々な本を読んで語彙力や文章理解力を高めることや多様な考え方に触れることが重要です。

中学・高校生が読みやすく、論理的に書かれた評論文の入門書として、幅広いテーマについてわかりやすく書かれているジュニア新書は最適なシリーズだといえるのではないのでしょうか。

入試対策の学習塾などでは論理的文章の読解力を養う講座が人気を集めていて、そのような講座でジュニア新書がテキストに使われることが多いとも聞きました。

もちろん、「受験に役立つからジュニア新書を読んでほしい」と言うつもりはありません。受験という目の前の目標だけでなく、広く社会のさまざまな課題に向き合っていく力を養っていくための本としてジュニア新書をぜひ読んでほしいと思っています。（やまもと しんいち：岩波書店）

手作りのブック・ランキング、続けてまもなく10回目

——「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」の取り組み

宮崎 健太郎

発表の動画は1位の本の著者や編集者が登場！
発表の翌日には県内各地の書店57店舗でコーナー展開！新聞紙上でも取り上げられ、公共図書館に行けばパンフレットも配布。そんな学校司書発信のブック・ランキングがあるのをご存知ですか？

その名は「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」。普段は「イチオシ本」と呼んでいるこの企画、2011年の1回目の発表から9回を数え、埼玉の高校図書館や書店では欠かせない恒例行事の一つとなりつつあります。ご存じない方は、まずはインターネットで「イチオシ本」と検索してみてください。また、YouTubeで「埼玉県高校図書館フェスティバル」を検索していただければ、1位に選ばれた作品の著者や編集者へのインタビューも見られますよ！

イチオシ本のはじまり

もともと、この企画、「埼玉県高校図書館フェスティバル」というイベントのスピノフ企画として2011年に始めたものでした。埼玉県は長らくすべての公立高校に専任・専門・正規の司書職を配置してきたのですが、2011年当時、県はこの採用試験を10年近く中断していました。このままでは、司書職はなくなってしまう……。そんな状況に危機感を覚え、学校図書館の役割を広く県民に伝える—それも、握りこぶしを掲げた喧嘩腰ではなく、「学校図書館は楽しい！」「この人たちは必要だ！」と思ってもらえるようなイベントを、高校司書有志の自らの手で開催することにしました。

そのイベントのなかで、県内の高校司書が日頃どんな本を高校生に勧めているのかを紹介する意味でも、高校生にイチオシの本を投票で紹介しよう、と始めたのがイチオシ本でした。

イチオシ本に選ばれる本は？

イチオシ本は、埼玉県内の高校に勤める学校司書

(私学の専任司書教諭を含む)の投票で決まります。投票の条件は、前年の11月から該当年の10月までに出版された本の中で「高校生に勧めたい」と思ったもので、投票は1人3冊まで。いちばん勧めたい本には3ポイント、2番目には2ポイント、3番目には1ポイントと投票のポイントに差をつけ、総得票ポイントの高い順に10冊までを「イチオシ本」としています。2018年版のイチオシ本には、埼玉県内の高校司書の3/4を超える118人から、のべ180冊への投票がありました。

ランキングとしての「イチオシ本」の面白さは、文芸書だけを選ぶランキングではない点かもしれません。例えば、2010年に発行された本の中から選んだ第1回のイチオシ本1位はセオドア・グレイ著『世界で一番美しい元素図鑑 The Elements』（創元社刊）でした。最初は集計結果に驚きましたが、公的な研究会を通して授業で使える図書館づくりを志向して発展してきた伝統が体现されたのかしれません。このあとに1位に入賞した8冊も、小説が5冊、ノンフィクションが1冊、図鑑が3冊とバラエティーに富んだラインナップとなっています。

著者や出版社とつながって

この企画は、学校にこもりがちな学校司書が、外の様々な方とつながる機会ともなりました。

例えば企画を始めた際、県民にイチオシ本を広く知っていただくこと、書店さんにPOPの展示をお願いしたのがきっかけで、いまでは県内の書店で広くフェアを展開していただけるようになってきました。

また、第1回の折に『世界で一番美しい元素図鑑』の版元である創元社の御担当からコメントを頂いたのに気を良くし、次の年に出版社を通じて著者が編集者のコメントをお願いしたところ、どの作品にもコメントをいただけるようになりました。

2013年、ランキングを動画配信することにした際、無理を承知で「著者の先生にインタビューを」と出版社にお願いをしたところ、「著者が来たがっていたのですが」、と担当編集者さんが収録会場に来てくださり、それ以降も動画には著者の先生や担当編集者さんにご出演いただいています。作品にかける思いや裏話を生で伺う機会は、私たちにとって財産となっています。

気づけば10年。さて、これから……

次回、2019年版のイチオシ本はなんと10回目。

10回記念の企画も進行中です。開始当初、ここまで企画が続くとは思いませんでした。それどころ

か、2012年に県が司書採用試験を再開、現在では県立高校の司書150名余のうち、この7年間に採用された世代が約1/4となりました。実行委員も今や12名中8名が試験再開後に採用された世代。ここまでイチオシ本を育ててきた実行委員会、司書自身の育ちの場ともなっています。

実行委員のみんなで、「学校図書館って、楽しい！」という思いを広く伝えてきた原点に立ち返りながら、この財産をどう未来に繋げていくか、楽しみつつ、実践していきたいと思っています。

(みやざき けんたろう：埼玉県立入間向陽高等学校)

※イチオシ本や埼玉県高校図書館フェスティバルの経緯について、詳しくは実行委員長の木下通子さんが書いた『読みたい心に火をつけろ!』（岩波ジュニア新書／2017）も、ぜひご覧ください。